

研究ノート

詞の輯録

—王観を例として—

Collecting the lost “ci (詞)”

— In Wang Guan (王観)’s case —

松尾肇子*

Hatsuko MATSUO

キーワード：王観 (Wang Guan)、劉毓盤 (Liu Yupan)、趙萬里 (Zhao Wanli)、唐圭璋 (Tang Guizhang)、王仲聞 (Wang Zhongwen)

要約

散佚した王観の詞は、最初に冒広生が宋代の選集から集め、続いて劉毓盤が宋から清にかけての選集や詞譜から輯録し、趙萬里はさらに詩話や類書を博搜した。唐圭璋は類書の『截江網』『全芳備祖』から四首を加えた。その後、王仲聞の協力を得て現在の『全宋词』に決着したが、個々の資料の信頼性など、なお検討の余地は残されている。

Abstract

Mao Guangsheng (冒広生) collected the lost “ci (詞)” poetry of Wang Guan (王観) from some the Song (宋) dynasty anthologies. Then Liu Yupan (劉毓盤) collected other lyrics from some anthologies and “cipu (詞譜)” from the Song (宋) dynasty through the Qing (清) dynasty. And Zhao Wanli (趙萬里) explored poetry notes and encyclopedia. Tang Guizhang (唐圭璋) added four lyrics from the books “Jiejiangwang (截江網)” and “Quanfangbeizu (全芳備祖)”. Later, with the cooperation of Wang Zhongwen (王仲聞), “Quan Songci (全宋词)” was completed, but there remains room for consideration, for example, in respect of the reliability of individual materials

* 東海学園大学人文学部人文学科

唐代に起こり宋代に流行をみた歌謡の「詞」は、元代には下火となって、やがて曲調を失い歌詞だけが残された。製版印刷はまだ定着し始めた頃であり、また流行歌謡というその性格上、即席に作られ歌われて終わるものも多数であったであろうし、紙に書かれたとしても一枚の歌詞カードであったり小冊子のような形態であったりしたことも少なくなかったと思われ、多くの歌詞は時の流れの中に消えていった。それでも士大夫と呼ばれる知識人や文人の作品は、一書にまとめられたり個人全集に附録されたりして徐々に刊行されるようになっていった¹。しかし、それも流行が下火になれば散佚し、現存する宋版は多くない。

清朝に及ぶと、一般的な近体詩や古体詩とは異なる韻文学として詞が再び注目され、清朝後期には填詞²が盛んに行われた。こうした再流行をうけ、清末から中華民国にかけて『四印齋所刻詞』や『景刊宋金元明本詞』『彊村叢書』など、宋元版を中心とする詞籍の覆刻や校訂が進められた。一方で、散佚した詞の輯佚は清朝から始まっていたが、個別の詞人を対象とする試みにとどまっていた。

こうした動きの総括として詞総集の編纂が行われ、民国に入ってから公刊され始めた。その初めは劉毓盤(1867~1927)の『唐五代宋遼金元名家詞六十種』(北京大学、中華民国14年)のようである。これに王国維(1877~1927)『唐五代二十家詞』(海寧王忠愨公遺書所収、民国16~17年)、趙萬里(1905~80)『校輯唐宋遼金元人詞』(國立中央研究院歷史語言研究所、民国20年)、林大椿(1883~1945)『唐五代詞』(上海商務印書館、民国22年)と続き、唐圭璋(1901~90)『全宋詞』三百卷(以下では初編本と称する)(國立編譯館、民国29年)が出たのである。詞人を年代順に配し、各詞人には小伝を附したのち作品を収録したものである。そして、中華人民共和國成立後、増補、訂正、再編された『全宋詞』不分卷(以下では再編本と称する)(北京中華書局、1965年)が決定版となっている。

初編本『全宋詞』は、唐圭璋氏が独力で編纂したものである。当時、唐氏が目撃できた資料は南京図書館および個人の蔵書に限られていた。夏承燾、趙萬里、王仲聞ら中国の詞学・文献学研究者、さらに日本の中田勇次郎なども資料を提供した³というが、限界はあった。再編本『全宋詞』は、巻に分けて線装されていた初編本とは洋装本という形態が異なるだけでなく、内容についても全面的な見直しが行われている。当時、王仲聞(1902~69)の惜しめない協力があつたことは、王仲聞撰、唐圭璋批注『全宋詞審稿筆記』の出版によって明らかになった。王仲聞氏は北京図書館の善本を閲覧し、千首余りを補足、小伝を含め数千カ所の誤りを正したのである⁴。

本稿では、在世当時人気を博し単行の詞集が出版されていた、北宋の王観をとりあげて、輯佚の過程を検証したい。

1. 王観『冠柳集』

王観について、『全宋詞』再編本の詞人小伝は次のように記す。

王観。字は通叟、如皋の人。嘉祐二年（一〇五七）の進士である。元豊二年（一〇七九）大理寺丞と為る。江都県知事のときに法を犯して賄賂を受け取った罪により、除名されて永州に編管となった（或いは曾て翰林学士であったという）。曾て「揚州賦」・「芍薬譜」を著わした。『冠柳集』があったが、伝わらず、今は輯本がある（王観。字通叟、如皋人。嘉祐二年（一〇五七）進士。元豊二年（一〇七九）為大理寺丞。坐知江都県枉法受財、除名永州編管（或云曾官翰林学士）。曾著揚州賦・芍薬譜。有冠柳集、不伝、今有輯本）。

さらにこの小伝の後に次の案語が加えられている。

案ずるに南宋にはほかに別の王通叟がおり、『韓滄澗泉集』巻九に見える。さらにもう一人王通叟がおり、名は壑で、『宝祐四年登科録』に見える。『截江網』『鳴鶴餘音』が収録する王通叟詞が、果たして王観の作であるかどうか、考証をまつ（案南宋時另有一王通叟、見韓滄澗泉集巻九。又有一王通叟、名壑、見宝祐四年登科録。截江網・鳴鶴餘音等所収王通叟詞、未知果王観作否、俟考）。

また、『全宋词』再編本刊行の後、孔凡礼氏が明初の類書『詩淵』から収録した詞を納めた『全宋词輯補』（中華書局、1981年）の小伝は、次のように記す。

原本は「元豊逐客」とする。『直齋書録解題』巻二十一には王観は「王逐客と号した」という。宋の徐光溥の『自号録』にも王観は逐客と号したという。王観は、『全宋词』にすでに見えている。王観が永州に編管となったのは、まさしく元豊年間のことである。そうであれば「元豊逐客」は王観である。また、『全宋词』が収録する王観の「減字木蘭花」一首（二六二頁）は、『詩淵』もまた録し、「宋元豊逐客」の作としているのも、また「元豊逐客」が王観であることの証明とするに足る（原作「元豊逐客」。『直齋書録解題』巻二十一謂王観「号王逐客」。宋徐光溥『自号録』亦云王観自号逐客。刊、「全」已見。観被逐編管永州。正為元豊間事。則「元豊逐客」即王観。又、「全」所録王観「減字木蘭花」一首（二六二頁）、『詩淵』亦録、謂「宋元豊逐客」作、亦足以証明「元豊逐客」即王観）。

以上、要するに、王観は、字を通叟、号を逐客といい、詞集『冠柳集』があったが散佚し、『全宋词』は各種の書物に引用されて残った詞を輯録したが、輯録原本の諸本は本名の王観ではなく字の通叟や号の逐客を作者名としているため、王観の作品か否かを確定できないものがあるのである。そこで、以下では『全宋词』再編本までの輯本の状況を遡ってみたい。

2. 冒広生、劉毓盤による輯詞

王観については、先述した劉毓盤の輯本より早く、清・冒広生『冒氏叢書』に「冠柳集」（光緒二十六年、曹元忠序）が収録されている。『冒氏叢書』は、冒広生（1873～1959）が一族の詩詞文を輯録した叢書であるが、王観は彼の郷里如皋の人であることによって体例を破って輯録されている。封面は「冠柳詞」、巻頭書名は「冠柳集」とし、十四首が収められている。詞牌の下に小字

で、詞序があるものは詞序と、最後の一首を除いてすべて出典書名が記載される。以下に『冒氏叢書』の記載を挙げ、〔 〕に正式書名、巻数等筆者の記載を補う。①～⑨は『唐宋諸賢絶妙詞選』巻五における掲載の順番を示している。

詞牌（初句）・詞序：底本

- 1 慶清朝慢（調雨爲酥）・踏青：花庵詞選〔唐宋諸賢絶妙詞選巻五①〕、
〔*本詞のみ『陽春白雪』および『草堂詩餘』との対校が小字双行で示されている。〕
- 2 清平樂（黄金殿裏）・擬太白応制：同上〔唐宋諸賢絶妙詞選巻五②〕
- 3 前調（宜春小苑）：同上〔唐宋諸賢絶妙詞選巻五③〕
- 4 雨中花令（百尺清泉聲陸續）・呈元淳之〔「草堂詩餘題作夏景」の校注あり。〕
：同上〔唐宋諸賢絶妙詞選巻五④〕
- 5 木蘭花令（銅駝陌上新正後）・柳：同上〔唐宋諸賢絶妙詞選巻五⑤〕
- 6 生查子（關山魂夢長）：同上〔唐宋諸賢絶妙詞選巻五⑥〕
- 7 卜算子（水是眼波横）・送鮑浩然之湘東：同上〔唐宋諸賢絶妙詞選巻五⑦〕
- 8 菩薩蛮（單於吹落山頭月）・婦思：同上〔唐宋諸賢絶妙詞選巻五⑧〕
- 9 江城梅花引（年年江上見寒梅）：同上〔唐宋諸賢絶妙詞選巻五⑨〕
- 10 天香（霜瓦鴛鴦）：樂府雅詞〔拾遺下〕
- 11 高陽台（紅入桃顚）：陽春白雪〔卷二〕
- 12 憶黃梅（枝上葉兒未展）：梅苑〔卷三〕
- 13 浪淘沙（素手水晶盤）・楊梅：同上〔梅苑卷九〕
- 14 臨江仙（別岸相逢何草草）・〔墨丁〕

王観の作品を最も多く収録する宋代の詞選集『唐宋諸賢絶妙詞選』（同じ編者による南宋詞の選集『中興以來絶妙詞選』と合わせて『花庵詞選』と称される）から九首を載録し、掲載順も変更していない。さらに宋代の選集である三書、『樂府雅詞』から一首、『陽春白雪』から一首、『梅苑』から二首を補足する。最後の「臨江仙」詞は明代に編纂された詞選集『花草粹編』や清代の『歴代詩餘』『詞綜』『詞譜』などに輯録されているが、その出典は墨丁で消去されて明らかではない。校記には他に『草堂詩餘』が対校されている。

次に、中華民国十四年に刊行された『唐五代宋遼金元名家詞六十種』は、民国八年（一九一九）劉毓盤が北京大学で「詞史」課程を教授していた時のものである⁵。趙萬里の「唐五代宋遼金元名家詞輯提要」によれば、該書は李白の『李翰林集』から『高麗人詞』まですべて六十種という。また「その欠点は、見た材料が少ないだけでなく真偽を分けず、校勘が精確でなく、出処が不明なところであって、読者を五里霧中に落とすようだ〔其弊不僅在所見材料之少而在真偽不分、校勘不精、出処不明、使人讀之如墜五里霧中〕」という。その「冠柳集」⁶（以下では劉毓盤輯本と称する）には以下の二十首の詞が収録されるが、『全宋词』再編本では13～16、18は存目詞とし、

13、18については出処を「劉毓盤輯冠柳集」と記載する。

趙萬里が批判するとおり劉毓盤は出処を明示していないが、後に示すように「冠柳集校記」には『梅苑』『花庵詞選』『草堂詩餘』『陽春白雪』『樂府雅詞拾遺』『花草粹編』『詞律』『詞律拾遺』『詞律補註』『歷代詩餘』『詞譜』『自怡軒詞譜』『(楊湜)古今詞話』『南曲譜』が示されており、明清の詞選集や詞譜も搜索して輯佚し、校訂を加えたことが分かる。たとえば「慶清朝慢」詞校記には次のようにある。

「慶清朝慢」調雨，“化工”『草堂詩餘』『歷代詩餘』皆作“東君”。“餽釘”句『陽春白雪』作“便帶得芳心”“撩花”作“鏤花”“翠綠”作“嫩綠”“眉山”作“眉端”。『詞律補註』謂秦氏校本必從改者即拋『陽春白雪』本也。

ここでは『花庵詞選』を基準にして他の選本のテキストと比較しており、『花庵詞選』収録詞は原則としてそれを底本として校訂する方針のようである。ただし、「清平樂（黄金殿裏）」には、

「清平樂」黄金，“錦茵”『花庵詞選』作“美人”，“君恩”作“天恩”。『花草粹編』曰一作王介詞，恐非。

とあり、また詞序も「応制」として『花庵詞選』を採用していない。「錦茵」「君恩」また「宣喚」に作るのは『耆旧統聞』巻九に「王冠卿」詞として引用される「清平樂」であり、それに従ったものと推測される。このように「校記」を参考にすると、底本は次のように推論できる。対校の資料を後にし、〔 〕は筆者による注記である。初句は割愛し、「校記」が無い作品については推定される底本を（ ）で示した。

詞牌・詞序：使用諸本

- 1 生查子：(唐宋諸賢絶妙詞選巻五⑥)
- 2 慶清朝慢・踏青：唐宋諸賢絶妙詞選巻五①、草堂詩餘、歷代詩餘、陽春白雪、詞律補註
- 3 雨中花・呈元厚之：唐宋諸賢絶妙詞選巻五④〔詞牌「雨中花令」〕、樂府雅詞拾遺、花草粹編
- 4 卜算子・送鮑浩然之浙東：唐宋諸賢絶妙詞選巻五⑦、歷代詩餘、(洪皓の)忠宣公集和韻一首、花草粹編、歷代詩餘、詞律拾遺、梅苑
- 5 菩薩蛮・歸思：(唐宋諸賢絶妙詞選巻五⑧)
- 6 江城梅花引：唐宋諸賢絶妙詞選巻五⑨、花草粹編、歷代詩餘、詞律拾遺、梅苑
- 7 清平樂・応制：西塘集耆旧統聞巻九か、花庵詞選、花草粹編
- 8 前調〔清平樂〕：(唐宋諸賢絶妙詞選巻五③)
- 9 高陽台：陽春白雪、自怡軒詞譜、南曲譜
- 10 木蘭花・柳：(唐宋諸賢絶妙詞選巻五⑤)〔詞牌「木蘭花令」〕
- 11 天香・冬景：樂府雅詞拾遺、古今詞話、歷代詩餘、花草粹編、歷代詩餘、詞律
- 12 臨江仙・離懷：花草粹編か、歷代詩餘
- 13 瀟湘静：樂府雅詞拾遺、詞律補註

- 14 蘇幕遮：花草粹編か、歴代詩餘
- 15 滿庭芳：樂府雅詞拾遺
- 16 感皇恩・憶旧：古今詞話、花草粹編、樂府雅詞拾遺、花庵詞選
- 17 憶黃梅：不明、梅苑
- 18 十月桃：(樂府雅詞拾遺)
- 19 浪淘沙・楊梅：(梅苑)
- 20 紅芍藥：詞譜

『冒氏叢書』本に較べると、『花草粹編』および『樂府雅詞拾遺』『詞譜』からの収録作が増えている。そのうち『樂府雅詞拾遺』巻下は、第四首に収録する「天香」に「王觀」とあり、第五首以下に「15 滿庭芳」「13 瀟湘靜」「18 十月桃」を配するが、この三首には作者名が記載されていない。劉毓盤は、これらも王觀の作と見なして収録したのであろう。ちなみに再編本『全宋詞』は存目詞とし、それぞれ、秦觀、無名氏、無名氏の作としている。

3. 趙萬里および初編本『全宋詞』

第二の輯本は『校輯唐宋遼金元人詞』所収「冠柳集」(以下では趙萬里輯本と称する)である。編著者の趙萬里は書誌学者でもあり、輯録した十五首附録二首のそれぞれについてその作品を収録する資料を列記し、また句ごとに双行で文字の異同を記して精確を期している。また作者の同定や異文についての案語を附す作品もあり、それらは下記一覧で番号に○を附した。附録の二首は王觀の作ではないと認定したことが案語によって分かる。それらによれば劉毓盤の使用した書物に加えて、詞選集の『詞統』『詞綜』のほか『詩話総龜』『苕溪漁隱叢話』『能改齋漫録』『堯山堂外紀』といった詩話、『直齋書録解題』、類書の『全芳備祖』『永樂大典』を搜索の対象としている。

詞牌・詞序：使用諸本

- 1 生查子：花庵唐宋諸賢絶妙詞選五、花草粹編一、詞綜七、歴代詩餘四
- 2 卜算子・送鮑浩然之浙東：苕溪後三十九引復齋漫録、詩話総龜後三十二引復齋漫録、能改齋漫録十六、花庵唐宋諸賢絶妙詞選、花草粹編二引能改齋漫録、草堂詩餘別集一、歴代詩餘十
- 3 菩薩蛮：花庵唐宋諸賢絶妙詞選、花草粹編三、草堂詩餘統集上、詞綜
- ④ 清平樂・擬太白応制：花庵唐宋諸賢絶妙詞選、能改齋漫録十七、詞綜
- 5 清平樂・同前：花庵唐宋諸賢絶妙詞選、花草粹編三、歴代詩餘十三
- ⑥ 浪淘沙・楊梅：梅苑九
- 7 木蘭花令・柳：花庵唐宋諸賢絶妙詞選、花草粹編六、歴代詩餘三十二
- 8 臨江仙：花草粹編七、歴代詩餘三十七、詞綜、詞譜十
- 9 蘇幕遮：花草粹編七、歴代詩餘四十一

- 10 雨中花令・呈元厚之：苕溪漁隱叢話全集五十九引漫叟詩話、詩話總龜後集三十二引漫叟詩話、詩人玉屑二十一引漫叟詩話、花庵唐宋諸賢絕妙詞選、草堂詩餘前集下（類編本一）、花草粹編五、又六引漫叟詩話、堯山堂外紀五十一、古今詞統八、詞律七、歷代詩餘三十四、詞譜九
- 11 憶黃梅：梅苑三、花草粹編八、歷代詩餘五十、詞譜十八
- ⑫ 江城梅花引：花庵唐宋諸賢絕妙詞選、花草粹編八、歷代詩餘五十三、詞譜二十
- ⑬ 天香：樂府雅詞拾遺下、花草粹編九、歷代詩餘五十九、詞譜二十四
- 14 慶清朝慢：花庵唐宋諸賢絕妙詞選、陽春白雪二、類編草堂詩餘三、花草粹編十、堯山堂外紀五十一、古今詞統十二、詞綜、詞律十四、歷代詩餘六十四、詞譜二十五
- ⑮ 高陽台：陽春白雪二
- 附録①感皇恩：花草粹編七
- 附録②紅芍藥：詞譜二十二

資料の博搜は明鈔本や別版にも及び、その精確さは現在に到っても価値を失わないが、唐圭璋が『全宋詞』を編纂した時にも全幅の信頼を寄せていた。初編本『全宋詞』は十九首を輯録し二首を附録するが、「高陽台」詞の後に「以上趙輯十五首」と明記するとおり、第十五首までと附録二首は趙萬里輯本に同じである。案語についても趙萬里の案語を、末尾の「ここに並べて比較する（茲並校之）」の語句を削除するほかはそのまます録し、「12 江上梅花引」では趙萬里が永樂大典の誤りを指摘した「又案」一条を削除している。したがって、第16首以下が初編本『全宋詞』において新たに加えられた作品であり、以下の四首である。

- 16 減字木蘭花（瑞雲仙霧）・寿女壻：截江網卷六
- 17 醜奴兒（牡丹不好長春好）：全芳備祖前集卷二十月季花門
- 18 永遇樂（風折新英）：全芳備祖後集卷五梅門
- 19 滿朝歡（憶得延州旧相見）：全芳備祖前集卷一牡丹門

ただし『全芳備祖』から輯録した三首は、第十九首末の案語に、「案ずるに、以上の三首を『全芳備祖』はいずれも王冠卿詞とするが、王冠柳の誤りではないだろうか。しばらくここに附録する（案以上三首全芳備祖並作王冠卿詞疑亦王冠柳之誤姑附録於此）」と記載するとおり、問題を含むものであった。

4. 『全宋詞』の改訂

中華人民共和国成立後『全宋詞』を再編するに当たっては全面的な見直しが行われた。「王観」の末尾には「以上の王観の詞十六首、断句一則是、趙萬里輯本冠柳集を用い、少し増やしたり削ったりした（以上王観詞十六首、断句一則、用趙萬里輯本冠柳集、稍有増刪）」とあり、初編本に断句一則が補充されたものの、作品数はかえって三首減っている。これは先に見た案語にある『全芳備祖』所収の三首を存目詞とし、『全芳備祖』の記載に従って王冠卿詞と認定して「王冠卿」に

移したことによる。また存目詞には「劉毓盤輯冠柳集」から二首が記録されている。各詞末に採用した出典が示されており、配列は出典の成書の年の順になっている。()内の数字は初編本における配列順である。配列番号に○を附したものには案語が附されているが、初編本・趙萬里輯本よりも簡略である。

- 1 (11) 憶黃梅：梅苑三
- ② (6) 浪淘沙・楊梅：梅苑九
- 3 (13) 天香：樂府雅詞拾遺卷下
- 4 (2) 卜算子・送鮑浩然之浙東：能改齋漫錄卷十六
- 5 (4) 清平樂・応制：能改齋漫錄卷十七
- 6 (10) 雨中花令・夏詞：苕溪漁隱叢話前集卷五十九引漫叟詩話
- 7 (14) 慶清朝慢・踏青
- 8 (5) 清平樂・擬太白応制
- 9 (7) 木蘭花令・柳
- 10 (1) 生查子
- 11 (3) 菩薩蠻・帰思
- 12 (12) 江城梅花引：以上六首見唐宋諸賢絶妙詞選卷五
- 13 (15) 高陽台：陽春白雪卷二
- 14 (16) 減字木蘭花・寿女壻：截江網卷六
- 15 (附録2) 紅芍藥：鳴鶴餘音卷四
- 16 失調名〔断句〕：詞品卷一
- 17 (8) 臨江仙・離懷：楊金本草堂詩餘後集卷上

こうした初編本から再編本への改訂は、王仲聞の意見が反映されたものである。二人の意見交換の様子は『全宋词審稿筆記』に窺うことができる。

ともに逐客の号があった王観と王仲甫、つまり「冠柳」と「冠卿」について、唐圭璋は初編本『全宋词』卷四十一「王仲甫」には「仲甫、字は明之、歧公の猶子である。『耆旧統聞』には仲甫は自ら逐客と号したという。思うに王観の誤りであろう（仲甫字明之歧公猶子耆旧統聞謂仲甫自號逐客蓋王観之誤也）」と記して「醜落魄（醉醒醒醉憑君）」の一首だけを著録している。つまり王逐客の詞はすべて王観の作品とする立場であった。これに対して王仲聞は、王仲甫を認める立場であり、再編本では王仲甫に七首が収録されたのだが、王仲聞はこのことについて数回にわたって質疑を送っている。

王冠卿は『全芳備祖』に見え、趙萬里が詞を輯した時、なお王観だと断定することはできず、二人だと考えて、「校記としてここに並記する」とだけ記しています。先生が王観だと断定したのは、必ずや根拠があつてのことに違いありませんので、御示教いただきたい（王冠卿見

全芳備祖、趙萬里輯詞時、尚未能断定其為王觀、仍以為二人、祇云茲並校之。先生断定其為即王觀、当必有拠、請示知。(65頁)

ここで趙萬里が断定を避けたと記しているのは、「浪淘沙(素手水晶盤)」の案語「案ずるに『全芳備祖』後集卷六の楊梅門には王冠卿の詞として引いているが、どちらが正しいのか分からないので、ここには並べて校記とする(案全芳備祖後集六楊梅門引作王冠卿詞未知孰是茲並校之)」を指す。

これに対して唐圭璋は、「王觀には『冠柳詞』があり、柳と卿の二字は形が近く、『全芳備祖』の抄本に誤りがあったために誤って、一人だと思ったにすぎません(不過以為觀有冠柳詞、而柳卿二字形近、繆全芳備祖抄本有誤、故以為一人)」と行間に朱筆で回答している。唐圭璋が見た『全芳備祖』は抄本であったため確信がもてなかったようだ。ただし王仲聞が見た『全芳備祖』も北京図書館所蔵の清抄本だったはずである。いま宮内庁書陵部に所蔵される南宋刊本『全芳備祖』は欠巻があるものの問題の部分は残されており、前集卷二十月季花門所収の「醜奴兒」および後集卷五梅門所収の「永遇樂」の二首については「王冠卿」の記載が確認できる。

また、「清平樂(黄金殿裏)」は、再編本では王觀および王仲甫の二人に重複して配されている。そもそも趙萬里輯本に王仲甫は無く、王觀「冠柳集」収録の該詞の案語に『能改齋漫録』と『耆旧統聞』を引き、「『花庵詞選』は本集〔冠柳集〕：筆者注」によったもので『能改齋漫録』と合致し、『花草粹編』は『耆旧統聞』に従って王仲甫としている。ここでは並べて校記とする(花庵詞選従本集与能改齋漫録合花草粹編従耆旧統聞引作王仲甫茲並校之)」と断定を避けている。それを初編本は『花庵詞選』によって王觀詞として輯録していた。再編本は、王觀では出典を『花庵詞選』から『能改齋漫録』へ、小序も「擬太白応制」から「応制」に変更している。一方、王仲甫にも『耆旧統聞』巻九から四文字の異同がある「清平樂(黄金殿裏)」を著録し、それぞれに案語を附している。これは、王仲甫に帰属させることを主張する王仲聞の重ねての提案を、唐圭璋がしりぞけた結果である。以下に王仲聞の質疑を見てみよう。

王觀には冠柳集があったので王冠柳と称し、王仲甫には冠卿集があったので当然また王冠卿と称することができます。(冠卿集は『耆旧統聞』に見えます。)『全宋词』は王冠卿を王冠柳としています。どのような根拠があったのか、確かに妥当な処置なのか、どうかお考えいただきたい(王觀有冠柳集遂称之曰王冠柳、王仲甫有冠卿集、当亦可称为王冠卿。(冠卿集見耆旧統聞。)全宋词以王冠卿為即王冠柳、有何根拠、是否確当、請再考慮)。(475頁)

王仲甫の集が冠卿集という名称であることが『耆旧統聞』から出るとは、以前にすでにお伝えしました。『全芳備祖』が収載する王冠卿詞を、先生はいずれも王觀の詞とお考えで、加えて『能改齋漫録』を証拠となさいますが、『能改齋漫録』はいずれも『全芳備祖』の各首に言及しているわけではなく、ただ清平樂詞のことを述べているにすぎません。先生はもともと王仲甫の集が冠卿であることを御存じなかったために、王冠卿を王冠柳となさいました。

いまはもうご存知なのですから、重ねてお考えいただけませんか（王仲甫集名冠卿集、出耆旧統聞、前已奉告。全芳備祖所載王冠卿詞、先生以為均王觀詞、且云有能改齋漫録作證、而能改齋漫録並未述及全芳備祖各首、祇述及清平樂詞。先生原不知王仲甫集名冠卿、故以王冠卿為王冠柳。今既知之、可否重新加以考慮）。(104頁)

これに対して唐圭璋は『能改齋漫録』卷十七は、記載は王觀の応制詞ですから、逐客とは王觀を指すのであり、『耆旧統聞』の詔が指しているのが王仲甫であるのとは同じではありません（能改齋漫録卷十七、記的是王觀應制詞、逐客的是指以為王觀、与耆旧統聞詔指的是王仲甫不同）(475頁)、「右の『能改齋漫録』が証拠となるのですから、王仲甫の作に帰する必要は必ずしもありません（為在右能改齋作証、亦不必還之王仲甫）(475頁)」とする。二人の主張は、王觀および王仲甫の作品に付された案語に反映されている。すなわち王觀の「清平樂」には「案ずるに『耆旧統聞』卷九にはこれを王仲甫の作とする。『耆旧統聞』の所載は、陸游からでており、どちらが正しいのかは分からない（案耆旧統聞卷九以此首為王仲甫作。耆旧統聞所載、出自陸游、未知孰是）」という案語が付され、王仲甫の「清平樂」には「案ずるに、この作品がまた王觀の詞ともされていることは、『能改齋漫録』卷十七に見える。『耆旧統聞』の所載は、陸游から出ており、依拠するものが他にあったに違いない。金繩武本『花草粹編』卷六はまた誤ってこの作を王介の作としている。王介の字は仲甫で、金氏はこれによって誤ったのである（案此首別又作王觀詞、見能改齋漫録卷十七。耆旧統聞所載、出自陸游、当別有所拠。金繩本花草粹編卷六又誤以此首為王介作。王介字仲甫、金氏因之而誤）」とある。

王仲甫、唐圭璋の大家二人が議論しても結論が出なかった原因は、唐圭璋は『能改齋漫録』を、王仲甫は陸游からの伝聞を記載したとする『耆旧統聞』を信頼して、譲らなかったからである。この二種はともに伝聞情報を記したものであるが、『唐宋諸賢絶妙詞選』よりも早く南宋前期に成立している。成立が早いことによって底本を詩話に変更したと考えられる。この処置の是非は、伝聞が少なくないという詩話の特質や、それぞれのテキストの成立を慎重に考慮して検討されるべきであろう⁷。また葉燾、王兆鵬両氏が、王觀の官歴からは翰林院にあって応制の詞を作った可能性はなく王仲甫の詞とするべきだと結論した⁸ような、伝記研究からの検討の余地も残されている。

王觀の場合、冒広生が輯録した十四首から始まり、再編本『全宋詞』の十七首に終結した。この間には搜索の対象資料を拡大しつつ、同時にその同定の検討が行われた。データベースなどが存在しない時代、『全宋詞』編纂に到るまでの先人の労苦は察するにあまりあるが、それでもその精確を期すために為さねばならないことはなお多い。

注

- 1 王兆鵬『宋代文学伝播探原』（武漢大学出版社、2013）「下編」に個々の詞人についての記載がある。そのま
とめとしてこのように述べられている。
- 2 清朝の詞は、楽曲が不明となっていたため、すべて既存の詞の平仄に合わせて文字を埋めたので、「填詞（詞
を填する）」という。
- 3 潘明福、王兆鵬「從『全宋词審稿筆記』看唐圭璋对『全宋词』的修纂及其人格風範」（『南京師大学報（社会
科学版）』第一期、2012年1月）参照。
- 4 潘明福「『全宋词審稿筆記』的學術價值」（『文学遺産』2011年第六期）参照。
- 5 『劉毓盤詞学論文集』「前言」（河南文芸出版社、2016年）による。
- 6 『唐五代宋遼金元名家詞六十種』の原本（北京大学、1925年）は未見。『劉毓盤詞学論文集』（河南文芸出版
社、2016年）は45種を収録し、その第八に「冠柳集」がある。
- 7 「清平樂」の底本『能改齋漫録』は、呉曾撰『能改齋漫録』「出版説明」（上海古籍出版社、1979年）によれ
ば、南宋の初代高宗の紹興24～27年（1154～1157）に成書したが、次の孝宗の隆興初年（1163）に禁書と
されて版は壊され、光宗の紹熙元年（1190）に重刊されたときにはすでに二巻を欠き、さらに刊本は失われて
現存テキストは明鈔本による。また『耆旧統聞』は「点校説明」（中華書局、2002年）によれば、伝聞や
多種の書物からの抜書きから成っており、底本は清鈔本である。
- 8 葉燁、王兆鵬「北宋詞人王仲甫・王觀事迹考弁」、『湖北社会科学』2006年七期。

『冒氏叢書』は京都大学人文科学研究所に、『全宋词』初編本は立命館大学詞学文庫において閲
覧した。記して感謝申しあげる。なお小稿は、JSPS 科学研究費・基盤研究（C）「冠柳三詞人によ
る南渡前後の詞研究」（課題番号 18K00361）による研究成果の一部である。